

<添付2>

平成20年5月19日

## 衆議院議員

中山 成彬 先生

拝啓 時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

先日、胡錦濤主席に対しまして南京事件に関する公開質問状を提出し、それを外国人記者クラブで記者会見することを Fax にて御知らせしました。産経新聞には、同封のとおり記者会見のことが報じられましたが、朝日などでは取り上げられなかったのは残念な限りです。

「史実を世界に発信する会」では、これを SDHF Newsletter にて、4000名のアジア学会会員他にメール配信しました。反応は大きなものとは言えませんでした。今後ともこういう情報を送ってほしい、貴重な情報であるといったポジティブなものから、反論までかなりありました。Haifa 大の Rotem Kowner 教授からは共感のメールがありました。Wisconsin 大の Edward Friedman 教授、Illinois 大の Charles Caowel 教授からはお説教めいた反論がありましたので、その論拠のなさを示す反論を出したところ、再反論が来まして、これを二度ほど繰り返しましたところ、相手は沈黙。居丈高にいい気になって「revisionist」にお説教する人達には、その歴史知識の貧困さを知らせてやるのが大事であると思います。こうしたことを地道に繰り返していくしかないと思っております。

さて、先に『南京問題小委員会報告』に関しまして、せつかくのすばらしい報告に瑕疵があるということを申し上げました。例の顧維鈞演説に関するものです。問題のポイントは、顧維鈞演説の載っている国際連盟理事会の議事録の全体を見ないで、局部を取り出して、事実とは関係のない推論をしている、ということでした。このたび、日本南京学界の年報『南京「事件」研究の最前線』（平成20年度版）（展転社）が刊行されました。同封のとおりです。ここに、前にお送りしました国際連盟議事録原文（英文）の全訳が載りました。（p. 89－119）。又、小生の書きま

した「南京虐殺二万人説の虚構—顧維鈞国際連盟理解演説の正しい読み方」も掲載されております。

ご覧戴けばお分かりのとおり、顧維鈞は「南京虐殺非難」をしているわけでも又「南京虐殺非難決議」をしようとしたわけでもなく、(顧維鈞が中心になってつくった)「極東の紛争の公正な解決」を訴える決議案の賛成演説の中で、外国紙を引用して「南京・漢口」(『ドイツ外交官の見た南京事件』(大月書店)では、こう訳されていますが、正しくは全訳文にあるように南京・杭州)で2万人の虐殺とちよっぴり触れているだけです。いわんや、これが否決されたなどというのは事実無根です。「極東の紛争の公正な解決を訴える」決議案は採択されています。

顧維鈞のこの支持演説のなかにちよっぴり引用された南京に関することは、その後二度と中国政府が正式に表明したことはありません。南京戦を挟む一年間に300回もの記者会見を外国人記者を招いて行なったにもかかわらず、ただの一度も南京で虐殺があったなどという非難をしていません。この2月2日の理事会以降もです。

中国政府が2万人とっていた、ということを用いるのはプラスではないか、との見方もあるでしょうが、もともとこの2万説は虐殺派(「ドイツ外交官」は虐殺派の頭目笠原十九司が序文を書いています)が取り上げたことであり、それをわれわれが喜んで追隨するのは如何かと思えます。

従いまして、「小委員会報告」のこの部分は、いまさら修正とは行かないでしょうが、「凍結」してあえて触れないようにするのが正解かと思えますが、いかがでしょうか。

いずれにいたしましても、南京問題は日本にとって重要な国際的な問題となっていますので、しっかりした根拠にたった主張をしていかないと、相手側から揚げ足を取られることとなりますので、重々気をつけなければいけないと思っている次第です。ご理解ご高配を賜れば幸いです。

敬具

「史実を世界に発信する会」事務局長  
茂木 弘道 拝